

國學院大學學術情報リポジトリ

和歌教育と短歌結社の動向序説

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 益井, 邦夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002046

和歌教育と短歌結社の動向序説

益井 邦夫

要旨

皇典講究所の創立に際して、總裁有栖川宮職仁親王は「告諭」の中で「国体ノ講明」と「徳性ノ涵養」を柱とする「建学の精神」を高らかに宣言した。本所・本大学はその実践のために古典の講究を重視し、その一つに和歌教育を置いた。僅か三十一文字の世界、そこには枕詞や序詞、掛詞、縁語、体言止め、本歌取りなど、様々な表現技巧が詰まっている。その講究を通じて道義を講明し徳性を涵養することを標榜した。爾来百三十年、比類無い歴史と伝統を有する学府へと発展した。本稿ではその経過を概説して、その教育の成果の一端を探り、一例として結社の動向などを見つめることにした。なお本稿には紹介しなかったが、大正七年十一月三日に発足した「白菊会」がある。鈴屋翁（本居宣長）を顕彰して始めた歌会は昭和初期までの短い期間であつたが、教職員、卒業生、時には一般の方も参加した歌会であつた。これもその成果の一つであるが、地方に帰った卒業生の中にも結社を設けて後進の指導に当る方も少なくない。その実態も今後の調査としたい。

キーワード

萬葉集、古今集、作文、短歌、演習会、講座、結社、歌御会始

講座の推移

國學院大學に於ける和歌教育が最初に取り入れられたのは、前身である皇典講究所の創立（明治十五年、一八八二）当初に於いてであり、既に百三十年の歴史と伝統を刻んでいる。

教授陣はまだ整つてはいなかったが、日下部成徴くさかべ せいけい助教による萬葉新採百首（賀茂真淵著）の講義が初めの様である。草創期のこととして試行錯誤を繰り返しながら、教科内容の改編を行い、第二学期には、予科文学部第一年の教科中、文章第四級の正に萬葉新採百首、それに本居大平が編輯した萬葉山常百首を加え、第二年第二級と第一級の副に古今集（古今和歌集）を、また本科第四年の第四級及び第三級、第五年の第二級及び第一級に萬葉集の講座をそれぞれ開講した。

五年後の明治二十（一八八七）年三月二十三日の本所規則改正に伴い、本

科（高等科）第五年第一級の語学に歌文集物語類と作文を、予備科（普通科）第一年に短歌を、第二年に長歌を各々置き、その担当講師に平田鎮胤門下の国学者である物集高見、歌人で書家・古筆研究家、そして宮内省御歌所寄人である阪正臣、本所卒業生で、萬葉集研究家の畠山健を迎え、特に翌二十一年には、歌人で国文学者の落合直文を迎えて、教科の充実を図った。このことは本学にとつて誠に特筆すべきことで、落合直文は逝くまでの半生を本所・本大学に在職して源氏物語、王政史、増鏡、古今集、大鏡、文法、作歌、土佐日記、栄花物語等を講じ、傍ら学監補として学生の生活指導と國學院の経営に参画した。そして何よりも和歌教育の普及に努め、その学統の基礎を構築する第一人者となつたのである。

本所に於ける和歌教育は國學院の開設（明治二十三年、一八九〇）に伴つて拡充され、本科第二年国文の第一学期に解釈・作文と作歌・美辞、第二学期と第三学期に解釈・作文と作歌・言語学、第三年第一学期に解釈・作文と

作歌を配置し、講師に阪正臣、落合直文、畠山健、そして国文学者の関根正直、教育者で国文学者の高津敏三郎、漢詩壇で活躍する佐藤寛（六石）の他に、宮内省御歌所寄人の黒川真頼、国文学者の木村正辞、国学者の物集高見、本居宣長の曾孫に当たり、紀州藩本居家四世当主で国学者、後に御歌所寄人となる本居豊頼、本居内遠門下で平田門に入った国学者で歌文に長じた久米幹文を迎えた。

明治二十六年第二学期の学科編成に於いては一年級に古今集、二年級と三年級に萬葉集を配し、古今集を落合直文、萬葉集を畠山健と木村正辞が担当し、明治三十（一八九七）年九月に於いては一年級の古今集を畠山健、作歌を落合直文、作文と作文・講話を宮内省図書寮の逸見伸三郎、二年級と三年級の萬葉集を畠山健、作歌を落合直文、作文講話と作文を阪正臣が担当し、阪正臣は授業時数外に作文を五時間、本居豊頼と畠山健は作歌で各々八時間、落合直文は十二時間講じた。

これまでの作文と作歌の授業の課題に就いては詳らかではないが、明治三十年に於ける課題は、因みに、

※作文科

一年級Ⅱ七草の説、萩を見る記、征清記念会の所感、孝明天皇祭、神皇正

統記を読む、某庭の梅をめづる詞

二年級Ⅱ礼服を古制に復すべしと主張するものあり、その可否、郊外の秋

色、慎独記、酒の利害、小児、パノラマ、古戦場を過ぐ

三年級Ⅱこゝろよげなるもの、萬葉集中長歌一篇の解釈、聖徳太子論、智は徳を伴ふこと能はざるか

※作歌科

一年級Ⅱ秋雨思郷・禁庭の菊・古戦場・新年雪・歳暮・紀元節・待花・名

所春月・雨後花、

二年級Ⅱ馬上聞雁・秋の旅・古刀・新年雪・歳暮・紀元節・隣家梅・夜帰

雁・静見花、

三年級Ⅱ琴声誰家・洋行する人をおくる・憫懣のうた・新年雪・歳暮・紀元節・春雨夜都・月前柳・隔水見花であつた。

院友会も後援

ところで明治三十二年、政府は中学制度の確立のために「中学校令」を公布して、従来の尋常中学校制度を改めて高等普通教育とし、そのために文部省は同年四月五日に省令第二十五号に依り教員免許規定を定め、卒業生に教員免許を付与することにした。本所は本学の卒業生に、日本歴史科と国語科の免許資格を取得させるため、その認可申請書を六月十三日付で文部省に提出し、七月二十七日付で認可となり、明治三十六年一月、第一〇期卒業生四名に無試験で歴史と国語・漢文の中等教員免許状を下付したが、然し文部省の規定には学生数の制限が加えられていたため、本科生並びに選科生だけで定員が一杯になり、本所は明治三十四年度に於いて夜間の別科（就業期間一年半）を設けて、向学心に燃える者、昼間の勤労者のために、その期待に応えたが、その教科にも当初、国語国文科に於いて通年（四学期制）の古今集と作文及び作歌を置き、古今集を本学第一期卒業の稲村真里、作文を同期の宮西惟助、作歌を国学者の丸山正彦に講師を依頼し、翌年には萬葉集を加え、畠山健が担当した。

一方、卒業生で組織する「院友会」は明治三十三年八月一日から二十一日までの三週間、第一回「國學院夏季講習会」を開催し、萬葉集（名歌解）の講義では木村正辞を講師に委嘱し、母校の教科充実を後援した。

明治三十五年には本科学科課程の改正を行い、国語国文科一年級に古今集と新古今集を配して畠山健、作文を鳥野幸次、作歌を落合直文、二年級と三年級に萬葉集を木村正辞、作歌を落合直文、作文を宮西惟助と小杉樫邨に委嘱した。

明治三十七年には、四月二十三日付で「専門学校令」認可となるに及んで、

師範部にも作歌を置き、講師に御歌所寄人の小出繁、御歌所歌人の千葉胤明、詩人で歌人、書家、国文学者の尾上八郎（柴舟）を招聘した。

翌明治三十八年九月には大学部予科一年が発足し、秋岡保治（神宮少宮司、神社本庁事務総長歴任）・宮川宗徳（神社本庁事務総長、國學院大學理事歴任）・折口信夫（釈迦空）・鎌田正憲（国文学者）等十数名が入学（いずれも第十八期、明治四十三年に卒業）し、千葉胤明から作歌の薫陶を受けた。

明治四十（一九〇七）年に彼らが二年を修了するに及んで同年九月に大学部本科一年を開講し、木村正辞と畠山健が萬葉集を、明治四十二年には千葉胤明と彌富濱雄（破摩雄、十二期）が作歌を担当した。

歌文演習会を開催

この様に萬葉集や古今集、作歌、作文に就いて、本学は大いに重要視して来たところであるが、学生の創作批評意欲を一層高からしめるために明治四十三年九月、課外授業の一環として歌文演習会を開設し、次の規定を実施した。

- 一、本会は本学正科の授業と相俟つて学生の創作批評の力を養ふを目的とする
- 二、学生は当然会員たるものとす
- 三、会の目的を達するため時々集会を開く
- 四、一会毎に講師一名催主として演習の方法を定む
- 五、作物は講師之を審査し優等者には賞品を授与す
- 六、選に入りたる作品は國學院雜誌に掲載す
- 七、本会の事業は場合により同窓会と合同して行ふ
- 八、本会の事務は主事之を担当し学生委員之を補佐す
- 同窓会、文芸部理事は本会の学生委員たるものとす
- 九、本会は会費を徴収せず

この規定の中にある同窓会は卒業生の会、本学で言う院友会ではなく、在

学生の団体で、その後の学友会に相当する。この規定に依り第一回は歌の会として国文学者、御歌所寄人の池邊義象を講師に、題を「水」と定めて短歌を募集した。十二月三日午後一時から杉浦重剛学監をはじめ、千葉胤明、青戸波江、本居清造、小林秀雄、彌富濱雄、三矢重松、武島又次郎（羽衣）、丸山正彦の諸講師が出席して開会し、先ず杉浦重剛学監の本会開設の趣旨と、本会が長く続くことを希望する旨の挨拶が有り、池邊義象講師が詠歌の心得に就いて講じ、午後二時半から応募数七十四首の選歌に入り、会員と講師と別々に審査を行い、会員は投票に依り、講師は別室で討議を以つて天・地・人の優劣を定めた。

その結果、先ず会員の投票に依つて選定された「天」の作品は、

天 大学部国文科第一年 渡邊 哲

さざ浪に采女の柳影ゆれて夕月夜する猿沢の水

講師に依つて選ばれた「天」の作品は、

天（地） 師範部国語漢文科第二年 伏 木 誠 義

巖くたく力いづこにひそむらむ このはをくぐる山川の水

講師の討議に依つて選ばれた講師の作品は、

人 彌 富 濱 雄

人とはぬ山のかけ路のたまり水 たまれるまゝに幾代へにけむ

会員の投票と講師の討議に依つて選定された作品は、

地 大学部予科二年 須 長 静 雄

奥山の岩もる水の清ければ うき世の塵もうかばざりけり

人 師範部国語漢文科第二年 佐々木 信 一

身をなげし人のありといふ青淵の 水にたゞよふ雲のかげかな

秀逸 師範部国語漢文科第二年 里 見 登 一

ふく風に乱れて散りし落葉の うかべるまゝにこぼるやり水

師範部国語漢文科第一年 松 村 範 三

森かげの白蛇が淵の水黒し あはれ幾度をみなとりけん

師範部国語漢文科第一年 瀬川 澄磨
来て見れば目高すくひしいさ、川昔ながらに水流れけり

師範部国語漢文科第二年 荒木 治三郎
さらさらとさざねなる、谷川の 水をあびつゝ小鳥あそべり

師範部国語漢文科第二年 三崎 幹一郎
こがらしに草も木末も冬枯れて あらは見ゆる谷のあひたみづ
因みに他の講師陣が詠んだ作品は、

学監

杉浦 重剛
民草をめぐむ水さへいつにかへ ことしばかりはいぶせかりけり
池邊 義象

いくしぐれしぐれ過ぎにし跡ならむ もみぢながらの水のたまれる
三矢 重松

大海とたゝへる水の上にありて 命生くべきみづのなきかな
武島 又次郎

家蔵をながすものとも見えぬかな 花のかゞみの春の川みづ
丸山 正彦

ながれ行く里にこそよれその川の すむも濁るも水のとがゝは
千葉 胤明

みなもとはふるくきはめず山水の すゑのにごりを何なげくらむ

この選考に当たり講師の歌も区別無く匿名で印刷して配布した結果であった。選歌の発表が終つて池邊義象講師の好評が有り、次いで三矢重松、武島又次郎、彌富濱雄講師の意見発表が行われた後、杉浦重剛学監から天(地)の伏木誠義に佐々木信綱著『国民歌集』、地の須長静雄に芳賀矢一著『月雪花』、人の佐々木信一には短冊が贈られた。次回は文の会とし、丸山正彦講師が担当することになり、その題を「寒夜」と決め、冬期休暇中の作業とする旨の発表があつた。然し、この歌文演習会のその後には、残念ながら記録が無いため、詳らかではない。然し率先して作歌の指導が行なわれて

いたことを伺わせる会の開催であつた。⁽³⁾

以上が草創期から明治末期までの状況概要であるが、講師陣の多くは宮内省御歌所と深く関わる歌人であり、その筆頭が御歌所初代所長で歌人、本学初代院長を務めた高崎正風であろう。高崎正風は明治天皇・皇后の御製、御歌を多く点じ、やんごとなき方々の歌の指導にも当たられた。高崎正風院長は学生に直接指導することは無かつたが、御歌所所員で本学卒業生(十二期、明治三十七年卒業)の彌富濱雄は門下である。また岡山高蔭は小出繁門下の秀逸で、本学に籍を置いて作歌指導に尽した。そうした系譜を含め、作歌、作文の教育の拡充が図られて行つたのである。

神職養成事業の開始

政府は、日露戦争(明治三十七八年)に勝利後の国民間の慢心気風に依る荒怠を戒めるため、明治四十一年十月十三日、大詔を発し、同時に政府は国家の将来を案じ、堅実なる神職を養成して神道精神を昂揚し、国本を培う必要を痛感した。そのために明治四十二年度予算に神社調査費を計上して神職養成の業を始めることとした。明治三十三年四月以来、学生教育の他に、神職講習会を開き、神職の養成にも務めて来た本所に五月三日、その業の委託を命じた。本所は早速、「神職養成部規則」を設け、第二十条の講習科目中「国文」の講習要旨を当初「国文ノ評釈及祝詞作文法等」としたが、暫くして、「祝詞宣命・風土記類及作文法」「祝詞作文及講評」「名文評釈」「萬葉集論評釈」に改め、「萬葉集論評釈」の講師を木村正辞に委嘱した。

大正八年に至り規則の改正を行い、教習科甲種及乙種二年学科の萬葉略解と古今遠鏡を折口信夫に、また神職講習科の和歌評釈を三矢重松にそれぞれ委嘱した。

大学令大学の昇格

大正元(一九一二年)八月、学部学則の改正を行つたが、その際、明治四

十五年六月二十五日に亡くなった畠山健の担当教科の後任講師に歌人で国文学者の佐佐木信綱と金子元臣、本居清造を嘱託し、萬葉集を佐佐木信綱、古今集と作歌を金子元臣、枕草子と徒然草を本居清造に委嘱し、他に武島又次郎が作文と作歌、千葉胤明が作歌を継続して受け持った。⁴⁾

大正九年四月十五日に大学令大学認可となるに及んで、予科学科課程の第一学年に講読、文法、作文・作歌を、同第二学年に、修辭学を加え、毎週の時数を五時間とした。学部でも国文科に萬葉集を置き、折口信夫が担当した。

大学令大学に昇格したことに依り、従来の師範部を高等師範科と改称し、同時に専門学校令に依る大学部を大正九年度から募集を停止し、大正十二年度を以って廃止したが、これに於いて高等師範科に改訂を加えて付属高等師範部とし、規定も改め、国文学科第一学年に講読、文法、作文、作歌、第二学年には他に文学史を加え、第三学年では講読、作文、作歌、これに文学史、言語学、音声学の三教科を加え、第一学年に於ける講読(古今集)と作歌を金子元臣、第二学年の作文を鳥野幸次、作歌を武島又次郎、第三学年の作文を金子元臣、作歌を千葉胤明がそれぞれ担当した。

前年大正十一年に於いて予科では作歌を折口信夫、作文を山崎麓、大学部に於いては作文を三矢重松、作歌を阪正臣、高等師範部に於いては作文を斎藤惇、作歌を三矢重松、千葉胤明、武島又次郎、折口信夫が担当、大正十二年に於いて国文学史(歌謡の変遷)の担当を高野辰之に委嘱した。

昭和二(一九二七)年一月三十日、専門学校令に依る神職部の設置を文部省に申請し、三月八日付で認可となったが、これに依り従来の教習科を昭和三年三月三十一日を以って閉鎖し、規則を改正して学年を三年間に延長、学科課程の国語・漢文の全学年に作文・作歌の履修を義務付けた。

翌四年一月には神職部の充実を図ると共に、時勢に即応する神職を養成し、卒業生に歴史科中等教員資格をも取得せしめるべく学則の一部を改正、同時に付属神道部と改称した。その第一学年の作文と作歌を岩崎春彦、第二学年の作歌を岩崎春彦、作文を西角井正慶、第三学年の作文を尾崎久彌、作歌を

鳥野幸次に委嘱した。

一方、神職部別科は教習科を継承するものとして継続したが、入学者が少なかったために、神職部とは別に神職養成機関の設置を再考し、昭和四年に神職養成部を再開、閉鎖以前同様に作歌の履修を義務付け、西角井正慶が担当し、第一学年では作歌と明倫歌集⁵⁾、第二学年では作歌と歌集講読を講じた。

萬葉夏期講座の開催

この昭和四年七月二十七日から八月二日までの一週間には、院友会が主催する第一回「萬葉夏期講座」が左の講師と講題で開かれた。

佐佐木信綱「萬葉集古鈔本と古筆断簡」

橋本進吉(東京帝国大学教授)「萬葉集に於ける用字法及び音声学上の問題」

題

久松潜一(東京帝国大学助教授)「萬葉集に現はれたる文学意識」

斎藤茂吉(医師、歌人)「近世短歌史上に於ける萬葉集」

折口信夫「萬葉集演習(巻一)」

武田祐吉「萬葉集演習(巻二)」

佐佐木信綱が行った八月一日には、同所に於いて萬葉集関係の文献展覧会が開かれた。また講演内容に就いては「國學院雑誌」第三十五卷第九号に「特輯萬葉号」として発刊された。以後、本会は昭和八年まで五回の開催を見たが、第二回以降、折口信夫が「萬葉集講義」で短歌、飛鳥藤原時代、民間詩、人麿・黒人・赤人作品講義、武田祐吉が「萬葉集講義」で長歌、奈良時代、宮廷詩、旅人・憶良・虫鷹作品講義、佐佐木信綱が「萬葉を読む人」「戸田茂睦と契沖阿闍梨」、新村出(京都帝国大学教授)が「萬葉植物名」、澤瀉久孝(萬葉集研究家)が「萬葉集の時代的考察」、北原白秋(詩・歌人)が「萬葉と韻律」、金澤庄三郎が「萬葉集文字雑考」、斎藤茂吉が「金塊集評釈」、岩橋小彌太が「中世の萬葉研究と国学の発生と」「大阪に於ける萬葉研究」、豊田八千代(萬葉集研究家)が「萬葉地理に就いて」、羽田春埜が「萬

葉集の古筆」を講じた。⁽⁶⁾

因みに折口信夫は大正十一（一九二二）年九月から翌年六月に掛けて、自身が主宰する短歌結社「白鳥社」の主催に依り、「萬葉集三十回講座」を、毎週土曜日午後六時から二時間の予定で開催した。第一期（九月二十三日）十一月二十五日、十回）は「上代叙事詩及民謡の時代」、第二期（十二月二日）三月十回）は「宮廷詩人の時代」、第三期（三月上旬）六月上旬、十回）は「創作詩人の時代」を講じたが、同講座の聴講者募集に際して「上代人の内部生活の一大記録としては、祖先が残してくれた少い文獻の中から、私達は、先づ此萬葉集を選ばねばならぬ。従来史家が口癖の政治史乃至は、上流階級の生活相を離れて、一步を民族精神・感情生活に進めれば、そこには、もう、此萬葉集以外に、何ものも見出せないであらう・萬葉びとの持った醇樸で、率直な心情より流れ出た自らなる韻律は、千数百年の昔に於て、既に此国に、幾多のほめろす・へしおどす・あるけおす・さつふおを生んだのであった。上代より奈良朝末期に至る四千首の歌謡は、収めて、此萬葉集二十巻に在る。本講座は此を三期に分けて、代表作物の詳細を極めた講義並びに、その鑑賞及び萬葉時代の思潮、文化の解説を試み、三十回で、萬葉集の明確な概念を与へようとするのである」と広告した。

院友会の講座は学外でも行われ、昭和五年八月の鎌倉に於ける夏期講座が最初で、昭和六年八月には福岡で、昭和七年八月には大阪でそれぞれ開催し好評を博したが、昭和八年は名古屋で開催することになり、母校と共催し、萬葉集夏期講座と銘打って七月二十六日から三十一日までの六日間、愛知県立第一高等女学校（現愛知県立明和高等学校）講堂を会場に開催した。

大阪での萬葉講座は金澤庄三郎・折口信夫・武田祐吉の三氏が講師を務め、八月四日から一週間、大阪府立清水谷高等女学校（大阪府立清水谷高等学校）に於いて開催し、三百二十名が聴講したが、資料を欠くため詳細は定かではない。然し大阪をはじめ近畿圏に在住する院友諸氏が大いに支援して非常な成功を納めたと言われる。

名古屋での開催は地元の要望も有つて、

我が国現下幾多の国歩艱難に遭遇する今日、吾々の祖先が詩に歌に遺した我文化の淵源である萬葉集を繙ぎ、温故知新の惟神の道に抛る家國一如の精髓に触れ、更にその精神を喚起し覚醒する。

ことを目的にしたが、地元からは、

実に有意義な企画で有り、当愛知県は歌学方面には幾多知名の学者を輩出し、我が歌学史上特殊な地歩と發達を遺したのみならず、今日も尚、新年詠進歌の数と預選の光榮に浴する者、全国に有数の地位を占むる当地に、わが國學院が生んだ萬葉学の至宝、折口信夫・武田祐吉両博士を迎へ、譬へ萬葉集の一端にもせよ、一般の聴講の機会を作つた事は奇縁でもあり、且多大の期待も懸つた。⁽⁷⁾

と歓迎した。講座は二十六日から二十八日までを折口信夫が「民俗学の話」、二十九日から三十一日までを武田祐吉が「萬葉集第五」を講じた。聴講者は二八二名であった。

戦時下での講座開催

皇典講究所の創立から五十年を閲した昭和七（一九三二）年に於ける作文と作歌の予科担当者は、作文を尾崎久彌と渾大坊小平、作歌を西角井正慶と武田祐吉、神道部に於いては作文を岩崎春彦、尾崎久彌、飯田秀真、作歌を岩崎春彦、西角井正慶、鳥野幸次、高等師範部に於いては作文を高崎正秀、尾崎久彌、渾大坊小平、御巫清勇、作歌を西角井正慶、斎藤惇、鳥野幸次、折口信夫、神職養成部にあつては作文と作歌を中野佐祐と西角井正慶がそれぞれ担当した。予科に於ける昭和九年度の作歌は藤井春洋が講じた。

昭和十四年、日中間の紛議の進展に伴い付属高等師範部第一部への入学志願者が大幅に減少したため、第一部（道義・国語・漢文）を停止して、第二部（歴史・国語・漢文）の拡充を図ることになり、昭和十五年、新たに付属専門部（高等師範部・興亜部）を設置した。高等師範部（四年制）の第一学

年には修辞学・作文・作歌（七時間）、第二学年には作文・作歌（七時間）、第三・四学年には作文・作歌（各八時間）を、興亜部の第一学年には講読・文法・文学史・作文・作歌（十時間）、第二学年には講読・文法・文学史・国語学・作文・作歌（十時間）、第三学年には講読・文法・言語学・文学概論・国文演習・作文・作歌（十時間）をそれぞれ置き、高等師範部の作文を石川富士男、尾崎久彌、作歌を藤井春洋、高崎正秀、鳥野幸次、折口信夫、古今集を金子元臣、萬葉集を武田祐吉、興亜部の作文・作歌を高崎正秀が講じた。

昭和十七年には作文・作歌の新任に白田甚五郎、藤井貞文を迎えたが、大東亜戦争は日増しに激化の一途を辿った中、本学は常に学問と教育への情熱は失わず、昭和十九年には萬葉日曜講座を企画し、九月二十四日から四回に亘って開催し、正科を折口信夫、武田祐吉、科外を金田一京助（国体と敬語―特に萬葉集の敬語について―）と西角井正慶（萬葉民俗）が講じた。更に、十一月六日から二十四日までの月・水・金の一か月間、古事記夜間講座を開き、河野省三（古事記序文）、折口信夫（古事記歌謡）、武田祐吉（古事記神代について）、科外として御巫清勇（祝詞の発生）、高崎正秀（古代ノ民俗）が担当した。十二月八日から五日間、夜間皇典講座も開催し、武田祐吉（古事記）、坂本太郎（日本書紀）、久松潜一（古事記伝）、河野省三（神皇正統記）、折口信夫（萬葉集）が担当し、多くの聴講者を迎えた。

戦後の講座開催

終戦から二か月後の昭和二十（一九四五）年十月、早くも授業が再開され、予科一年の作文・作歌を高崎正秀、二年を高崎正秀と西角井正慶、専門部の萬葉集を西角井正慶、作文・作歌を御巫清勇、翌年の萬葉集を武田祐吉、専門部の俳諧を高崎正秀が担当。昭和二十二年四月には一年課程の女子教養科を開設し、萬葉集を西角井正慶と今井福治郎、作歌を千勝重次に委嘱した。

昭和二十四年四月、付属施設として神道研修部を置き、昭和二十六年五月

四日には、神道研究の素養と普通神職養成を目的とする文学部神道研修別科を開設し、作文・作歌の講師に岡野弘彦を委嘱、昭和三十六年に春田宣^{あき}に交替した。

昭和二十五年に始まった「華道学術講座」でも萬葉集も含めて今泉忠義が「萬葉集植物の歌」を講じた。

昭和二十九年には『公開古典講座』（萬葉集講座・源氏物語講座）を始め、今日まで五十七年間、継続しているが、第一回を七月二十一日から二十五日までの五日間に亘り開催し、武田祐吉「吉野の仙女」、金田一京助「萬葉集の言語」、岩橋小彌太「中世に於ける萬葉集の研究」、西角井正慶「萬葉集と芸能」「源氏物語と芸能」、今泉忠義「上代の音韻」「源氏物語の語法」、高崎正秀「記紀歌謡と萬葉集」「源氏物語成立論」、藤野岩友「萬葉集と詩経」、大場磐雄「考古学からみた萬葉人の生活」、堀一郎「萬葉集と民間信仰」、樋口清之「平安朝の婦人生活」、佐藤謙三「宇治十帖への展開」、田邊正男「源氏物語の敬語」、坂本太郎「萬葉集と奈良時代の文化」、山岸徳平「源氏物語に於ける歌論」、野間清六「絵巻物の発生」、吉田健一「英吉利の古典と日本の古典」、他に久松潜一・安津素彦が担当した。

昭和三十三年四月、神道学専攻科とは別に二年制の神道研修科を設け、正階資格授与の養成を計った。この講座は一年次では昼間（一部）と夜間（二部）に開講したが、二年次では夜間の開講とし、一年（神道研修科別科神道専修）には作文・作歌を課し、春田宣が担当した。

創立章創期に採用した作文・作歌の名称はこの頃を境に、カリキュラム表から消えた。それは本学に於ける近代教育から現代教育への過渡期を象徴する名称の消滅であったと言えるようか。

結社の推移

皇典講究所創立以来、長年に亘る作文・作歌教育の成果は、例えば多くの歌人を輩出したことで、名声を博した卒業生も少なくない。その中には結社

を起こして斯界の発展に尽す卒業生も多く、一例を挙げれば折口信夫の結社が知られる。

折口信夫が母校の教員に迎えられたのは大正八（一九一九）年一月のこと、金子元臣の臨時代理講師として十訓抄講義を担当した。同時に短歌会「くがたち社」を起こし、後進の指導に当った。翌年九月九日付で専任講師、更に大正十年九月三十日に教授に昇進するに及んで、その年の暮に、アララギの選者を辞退して短歌結社「白鳥」を起こし、大正十一年一月一日付で雑誌「白鳥」を発刊した。先に「白鳥社」の萬葉集三十回講座の開講に就いて触れたが、それはこの結社の主催であつた。

この年、高等師範部の学生間に結社「くゞひ（鵠）社」と「高日社」が起こつたが、「高日社」に就いては資料不足のため詳らかではない。「くゞひ社」は大正十四年五月に雑誌「くゞひ」を創刊したが、現在、第一巻第一号（五月号）と第二号（六月号）が欠本のために創刊の辞を知ることが出来ないのは甚だ残念だが、昭和十九年頃まで続いている。編輯兼発行者は高等師範部出身の山崎誠（三十三期、大正十四年）で、氏の寓居（東京市小石川区大和町十七番地、暫くして出身地の千葉県市川町〔市川市〕に変更）が発行所となつてゐる。掲載の人物は多く、全員の名前は省略するが、残存する最初の第一巻第三号（七月号）は大正十四年九月二十九日発行で、全十六頁、定価二十五銭、印刷所は誠文堂印刷所（小石川区表町一〇八番地）とある。

「白鳥社」は大正十四年四月にも萬葉二十五回講座を行い、二十二日から毎週火・水・土曜日の三回、二か月間主催した。その年の一月には予科生徒の間に短歌結社「鳥船社」が起つた。翌大正十五年（昭和元年、一九二六）四月、雑誌「とりふね」第一選集を発刊した。欠本が多く、現在把握してゐる雑誌は、戦前は「鳥船」第十一集を昭和十六年五月三十一日に発行して中断した。因みに第二集は昭和二年二月（欠本）、第三集は昭和三年五月、第四集は昭和八年四月、第五集は昭和九年三月、第六集は昭和十年十月、第七集は昭和十二年四月（編輯兼発行者〓高崎英雄、鳥船社発行、一四三頁、定

価一円三十銭）、第八集は昭和十三年七月（編輯兼発行者〓青池竹次、鳥船社発行、校合〓藤井貞文・藤井春洋・高崎英雄・青池竹次・石上堅。一三九頁、定価八十銭）、第九集は昭和十四年六月（編輯兼発行者〓青池竹次、校合〓藤井貞文・藤井春洋・青池竹次・石上堅。一三六頁、定価八十銭）、第十集は昭和十五年四月（編輯兼発行者〓青池竹次、校合〓中村浩・藤井貞文・藤井春洋・高崎英雄・青池竹次・石上堅。一五一頁、定価八十銭）、第十一集は昭和十六年五月（編輯兼発行者〓青池竹次、発売所〓八雲書林、一六三頁、定価一円）であつた。

戦後の復刊の時期は不詳だが、復刊「鳥船」第三集は昭和二十八年七月十日に発行している。折口信夫はその発刊を見て九月三日に永眠した。その第三集の編輯兼発行者は塚崎進（以後同じ）で、体裁はガリ版刷り、四十二頁、非売品であつた。第十四集は昭和二十九年六月、第十五集は昭和二十九年七月、第十六集は昭和二十九年九月、第十七集は昭和二十九年十一月、第十八集は昭和三十年八月で、第四集から第十三集は未確認のため不詳である。第十九集以後の発行も未確認である。

他に「鳥船批評集」（昭和十二年十二月十五日発行、編輯者〓鳥船同人、一七二頁、発行兼印刷者〓壬生書院〔本郷区駒込吉祥寺町二〇〕）、「鳥船新集第一」（昭和十八年六月十日発行、編者〓藤井春洋、校合〓貞文・春洋・英雄。二三四頁、発行者〓米岡来福〔神田区西神田〕、発行所〓青磁社三千部）、「鳥船新集第二」（昭和十八年七月二十日発行、編者〓藤井春洋、校合〓浩・貞文・春洋・英雄。二二八頁、発行者・発行所同じ、二千部）、「鳥船新集第三」（昭和十九年十二月十日発行、編者〓折口信夫、三六四頁、発行者・発行所同じ）がある。

折口信夫の周辺にはこの様に、くがたち社、白鳥社、くゞひ社、高日社、鳥船社がそれぞれ起こつた。現在までに知り得た各社員名を記すならば、例えば、「くがたち」社員の場合、中には歌号を名乗っている者がいて、本名との照合が取れない者もいるが、それを含めると、荒井敏夫、石川紫草、石

川富士男、伊藤公平、海野勲、遠藤明三、大内武夫、鹿島潤一郎、栗田峻、黒川資雄、毛山雅夫、渾大坊小平、佐伯敬介、猿石道伯、篠崎彌之助、島田彌六、鈴木輝、千家白雨、高崎正秀、高安周吉、武岡博三、橘宗利、武部久也、谷口景雲、谷口山樞子、坪井忠彦、西角井正慶、藤野岩友、船木清樹、穂積忠、細川清、松山俊親、三上永人、椋本留、矢尾板敦。雑誌の発行は確認するに至っていないが、大正九年三月（第二十六卷第三号）から翌十年二月（第二十七卷第二号）まで「國學院雑誌」に適宜掲載発表している。

「白鳥」社員には、今泉忠義、薄井一、久保寺逸彦、椋本留、栗田峻、黒川資雄、桑田忠親、桑原廉一郎、猿石道伯、高崎正秀、高安周吉、武岡多藝志、武部久也、坪井忠彦、中村元治、日戸力雄、深草秋人、藤野岩友、細川清、三上永人、見沼冬男（西角井正慶）、由利貞蔵。このうち雑誌の編集に従事したのは見沼冬男、細川清、高崎正秀であった。雑誌は第一巻第一号を大正十一年一月に創刊したが、現在、確認が取れている号は最終巻となった第一巻第四号（七月一日発行）である。発行兼編輯人は細川清、定価三十銭、郵税二銭、発売元は文武堂書店となっている。

「鳥船」社員には、折口信夫が大正十二年五月二十六日に、院友（六期）で講師の高橋龍雄（国文法担当）の仲介で慶應義塾大學文学部兼任講師を兼務したこともあって、同塾生も多数含まれている。

相澤正雄、青池竹次、赤羽甚衛、荒井憲太郎、有田盛宏、安西公也、池田彌三郎、石上堅、石上順、石川年、飯泉六郎、市川清、市川良輔、伊藤良吉、稲垣富夫、今井武志、今村充夫、梅木春和、大田保、大脇月甫、大森義憲、岡田桂、岡野弘彦、岡本太郎、奥野泰雄、倉石正、小笹功、小田切勝、小野甲子郎、小原淳、小原忠、於保みを、香川景松、香月良明、栢木喜一、加藤孝市、加藤守雄、角川源義、門林武重、神谷友保、神谷諦雅、川崎誠、川田俊雄、川原茂、河村半之助、岸田文男、北川原平造、木村覺、清崎俊郎、熊谷武至、畔柳稔、小池朱需廬、小池元男、河野相光、小林俊雄、小松操、斎藤達夫、佐佐木雪靈、島崎幾雄、清水愛国、白井永二、菅

原昭治、杉山彦一、鈴木崇生、鈴木太良、鈴木正彦、千家克雄、高崎繁雄、高崎英雄（伊馬鶴平・春部）、高階廣道、竹内榮一、武知昌行、橘誠、龍英勝、辰巳雅彦、谷本政武、千勝重次、千勝三喜男、塚崎進、辻村銃一、戸板康二、鳥居脩、内木成美、仲井幸二郎、中尾達郎、中塩清之助、永野倜、中村小浩、中村浩、西角井正二、西角井正文、西村亨、西山謙二、野口庄三郎、波多郁太郎、原勝文、氷室良彦、福島惣一郎、藤井貞文、藤井春洋、藤野岩友、藤原恭平、藤原義孝、細川敬之、堀内民一、牧田茂、牧田益男、松嶋淳、松野一郎、松原純一、松本義男、松山亮次郎、三村達磨、道田忠雄、宮川淳、村田正言、村田正志、目崎正明、目崎美雄、森岡鍊二、森川喜太郎、森口武男、森崎國男、森知矩、守屋素衛、矢島清文、矢野敏雄、矢野花子、山川弘至、山極眞平、山田爲康、山村金三郎、山本敏雄、吉田謙徳、吉田真次郎、吉田義孝、吉野正男、米津千之、若尾義一、若山善郎、和田篤太郎、和田正洲、渡辺菴一。

歌御会始に関わる

皇室新春行事の一つである歌御会始に於いて、國學院大學関係者が多くその榮に浴している。戦後に限って見るならば、先ず召人（召歌）には、千葉胤明（昭和二十三年Ⅱひとのよまなごみゆかなむ木枯のすさまじかりしやまも霞めり）、佐佐木信綱（同Ⅱ春の日はやはらぎにほふ磐山のこのこごしきもふみさくみ行かむ）、武島又次郎（羽衣、昭和二十四年Ⅱとりどりのすがたもみえてうめやなぎ雪おもしろきけさのにはかな）、鳥野幸次（昭和二十五年Ⅱをとめらがつむ野となりてなつかしくもえしを草の花もつもりあり）、岡三郎（麓、昭和二十六年Ⅱ信濃路はつづく山山雪つもりけさのそらの明るさ）、柳田國男（昭和三十年Ⅱにひ年の清らわ水くみあげてさらにいづみの力をぞおもる）、金田一京助（昭和三十二年Ⅱ天地のそきへのきはみ照りわたるおほきともしび太陽あがる）、久松潜一（昭和四十五年Ⅱ道真も契沖もめでし梅の花今年も吹きぬ清くすがしく）、高崎正秀（昭和四十

七年「たなはる山青垣」かがよひて今あらた代に朝あけ来たる、伊馬春部（高崎英雄、昭和五十一年「ふりかへりふりかへり見る坂のうき子はしきりに手をふりてをり」、桑田忠親（昭和五十八年「満開のやへざくらばな雲に映え遠ざかりゆく佐渡が島やま」、石橋貞吉（山本健吉「ふるさとの伊木力みかんみどり葉の大き葉つけて花のごとくあり」、上田正昭（平成十三年「山川も草木も人も共生のいのち輝け新しき世に」の諸氏で、他に昭和二十二年に始まった後援会理事で日本画家の安田新三郎（靉彦、昭和三十四年「家ぬちふかく窓より見ゆる枯山になごめるいろの冬となりし」、法人理事の石坂泰三（昭和三十五年「メンデルの氷河の前にたたずみて太古の光まのあたり見る」の両氏がいる。

選者では千葉胤明（昭和二十二年）・佐佐木信綱（同）・鳥野幸次（同「昭和二十五年」）・尾上八郎（柴舟、昭和二十四年「三十二年」）・折口信夫（昭和二十五年「二十八年」）・岡野弘彦（昭和五十四年「平成二十年」）が務めた。

卒業生の入選者には昭和三十年の御題「泉」に飯田秀真（沖縄の与那原みちふる泉みづ清かりき今もあらむか）が知られる。

國學院大學に於ける標題に就いて尚、欠落した部分が多く資料の探索に努めているが、これまでの調査の一端を紹介するに留める。

註

(1) 共編著『國學院大學百年史』上二七六頁引用。

(2) 『國學院雜誌』に掲載された『國學院夏期講習会』の広告に依れば、

■「萬葉集名歌解」木村正辭、「神武天皇記講義」（出雲風土記国引解）井上頼國、「枕草紙中名文解」畠山健、「日本文典」三矢重松、「日本文学史」武島又次郎、「国文の解釈に必要な制度の一斑」松本愛重、「日本制度史」熊谷直一朗、「言語学」保科孝一、附録「国文を説きて片輪車の不自由を論ず」物集高見、「国語教授に就て」高津敏三郎（『國學院雜誌』第六卷第五号）。

■「来る八月一日より二〇日まで三週間本院に於て講習会を開き男女とも入会を許す。志願者は七月二五日までに申込みべし。講習時間毎日午前七時より四時 聴講料金貳円。学科講師「萬葉集」木村正辭、古文（古事記及出雲風土記）井上頼國、「中古文（枕草紙）」

畠山健、「日本文典」三矢重松、「日本文学史（中古以下）」武島又次郎、「日本制度通」松本愛重・熊谷直一朗、右の外に猶諸講師の科外講演あり。国史国文夏期講習会招聘の紹介に應ず、望の向は条件を詳記して申込るへし、明治三十三年六月 東京麹町区飯田町五丁目八番地 私立國學院（『國學院雜誌』第六卷第六号）。

■「國學院夏期講習会」ハ第一回のこと、て、順備何れと、頗繁忙を極めた歟れど、係り員の尽力にて、予定の期日より、講習を開始し、此程中の大暑にも係らず、毫も缺席者なく、経過頗良好にして、目下二百余名の講習生あり。本月二日を以て閉会すること、なるべきに就き、該講習生に限り、浜離宮其他の拝観の榮を得んと、目下夫れぞれ計画中なりといふ（『國學院雜誌』第六卷第八号）。

■この講習会の講義概要は『國學院講習会講義』として誠之堂（神田今川橋通）から刊行、定価金六五銭（『國學院雜誌』第七卷第四号）。

(3) 『國學院雜誌』第十六卷第十二号（明治四十三年十二月刊）七九〇頁、九五頁参照、『國學院大學百年史』上四三〇頁参照。

(4) 『國學院雜誌』第十八卷第九号、七八〇頁参照。『國學院大學百年史』上四九四〇頁七七参照。

(5) 天保から文久にかけて水戸徳川藩で編纂され、文久二年（一八六二）に藩校弘道館と支藩宍戸藩の藩校修徳館の藩版として刊行された。記紀萬葉から文久に至る歌から約千二百首を、君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友・神祇・国体・文・武・拾遺に分けて全十卷五冊に纏められた。近世・近代の国民教化に影響を及ぼす歌集となった。

(6) 拙編著『國學院大學院友会百二十年史』一六八〇一七二頁参照。

(7) 昭和八年秋季号「会報」参照。

(8) 『國學院大學百年史』一一三〇一一一七頁参照。

(9) 『國學院雜誌』第二十八卷第八号掲載広告文引用。